論文

立教大学観光学部紀要 第22号 2020年3月
Rikkyo University Bulletin of Studies in Tourism No.22 March 2020
pp.4–20

懐古論メモランダム
――『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ台湾編における懐かしさ, ノスタルジア, レトロ

Memorandum for the study of nostalgia:
natsukashisa, nosutarujia *and* retoro *in the Chikyu No Arukikata Guidebook Series for Taiwan*

岩田晋典*
IWATA, Shinsuke
＊愛知大学国際コミュニケーション学部・教授

Summary: While the act of yearning for past things and its effect on society and culture have been studied in terms of nostalgia, little attention has been given to the fact that there exist different modes of expression to represent the past. Focusing on Japan's foremost travel guidebook series, Chikyu-No-Arukikata-Guidebook, this paper examines the text in terms of nostalgic expression in Japanese travel media for Taiwan, which has been well known as a "nostalgic country" for the Japanese public.

The text analysis reveals three points. First, nostalgic discourse has increased since the guidebook's first edition in 1987. Second, two loanwords *nosutarujikku* (ノスタルジック) and *retoro* (レトロ), especially the latter, have shown a rapid growth, as the Japanese word *natsukashii* (懐かしい) has decreased. Third, the loanwords are used even for the qipao or Qing dynasty.

This change can be paraphrased as foreignization of nostalgia, not only because the former two are loanwords from English, but also its object of nostalgia expands from Japaneseness in Taiwan to East Asian cultural elements. Foreignization is a process of detachment of the Japanese self from nostalgia. The paper also suggests the importance of retro as an analytical concept in the study not only of nostalgia but also of memory.

Key words: ノスタルジア（nostalgia），レトロ（retro），懐古（reminiscence），旅行メディア（travel media）

I　はじめに
II　“なぜか懐かしくノスタルジックでレトロ”
　1. “懐かしさ”
　2. “ノスタルジア”
　3. “レトロ”
III　懐古表現の外来語化
　1. 過去30年間の変化
　2. 外来語化とそのパターン
　3. 外来語化の背景
IV　ノスタルジアからレトロへ

1)脱自己化としての外来語化

2)レトロというパースペクティブの重要性

V　むすびにかえて

I――はじめに

過去を懐かしむ行為とそれが持つ社会的，文化的，政治的，あるいは経済的な意味は，一般的にノスタルジアという用語のもとで研究されてきた．ツーリズム研究でも同様である．

けれども，ツーリズムの現場に目を向ければ，過去が“ノスタルジア”のほかに“懐かしさ／一い”，“郷愁”，“懐旧”，“面影”，“レトロ”といった多様な表現を用いて形容されていることがすぐに分かる．それはとくに，実際に旅行という行為がなされる場だけではなく，旅行メディアなどの言説表象空間で顕著である．

これらの懐古表現は，当然ながら意味内容の面でも微妙に異なっており，たとえ分析用語だとしてもノスタルジアという概念で括るべきなのか躊躇してしまう事例も多々存在している．

その一例がレトロ概念である．本稿で論じるように，レトロは台湾を扱う日本語旅行メディアで多用されるものであり，頻度も増加し続けてきた．今日台湾全土に散らばるいわゆる“リノベ”のスポット（日本統治期などの古い建築物を改装した公共施設や飲食店，雑貨店など）を紹介するときも，レトロという表現が決り文句のように用いられている[1]．レトロは，現代日本人の台湾経験を理解するうえで避けて通ることが出来ない一分野を形成していると言っても過言ではない．

旅行メディアにおけるレトロの多用は台湾に限ったわけではなく，香港などにも当てはまる傾向であるが，こうした状況とは対照的に，レトロ概念自体に焦点を当てた研究は皆無に等しく，レトロは所与のもののように扱われている．ツーリズム研究の中で最近のものとして，たとえば「レトロツーリズム」を論じている（天野，2017）の論稿があるが，考察の焦点はタイトルの通り，レトロを用いたツーリズムという仕組みにある．

ツーリズム以外の研究分野では，（高野，2018）による「昭和ノスタルジー」についての優れた研究があり，考察にはツーリズムも含まれている．とくに，1980年代に始まるレトロの系譜について詳しく論じており，本稿の議論でも大いに参考にしている．けれども，そこでも分析の枠組みはノスタルジアを中心としたものである．

レトロをノスタルジアの一部のように位置づけるノスタルジア偏重の傾向はおそらく海外においても同様である．たとえばRoutledge社の『Encyclopedia of Tourism』（Jafari，2003）でもnostalgiaの項目が設けられている一方でretroはない．

こうした現状をふまえ，本稿では台湾に関する日本語旅行メディア，日本で最もメジャーなガイドブックシリーズ（少なくともその一つ）である『地球の歩き方ガイドブック』シリーズの台湾編（以下，台湾編）に焦点を当てる[2]．

> 自然に触れ 人に触れ／深くしみ込む心の旅／忘れかけてた何かを思い出す／太陽の島台湾

これは，1994年版から1997年版までの台湾編の表紙に記載されたキャッチコピーである[3]．「忘れかけてた何か思い出す」という言葉が示す“どこか懐かしい台湾”という台湾像は，同デスティネーションに関する旅行言説の中でごくありふれたものである．本稿では懐古表現のうち，“懐かしさ”，“ノスタルジア”そして“レトロ”という三つの一般的な懐古表現に注目し，その違いや推移を分析した上で，懐古現象に関する分析枠組みの

再検討を試みることを目的とする．

台湾編の初版は，海外旅行が時代の華となった1980年代後半の1987年に刊行されている．その後，同シリーズの他地域タイトルと同様に，ほぼ毎年改訂され，最新の第30版すなわち「2019～2020年版」（以下，2019年版）に至っている[4]．以下本論では，これら計30巻を分析対象にし，台湾や各地の観光スポット，コラム記事，読者投稿というテキストの中で用いられる上記の懐古表現を分析する．

II――“なぜか懐かしくノスタルジックでレトロ”

本章では，“懐かしさ”，“ノスタルジア”そして“レトロ”を順に取り上げ，その意味を探ってみよう．“懐かしさ”と“ノスタルジア”は，文中の機能によって「懐かしい」や「懐かしく」，「ノスタルジック」のように形容詞や副詞の形に活用するし，「なつかしい」というひらがなや「ノスタルジー」という形態が用いられることもある．本稿ではそれらを一括してそれぞれ“懐かしさ”と“ノスタルジア”と表記する．

これら三つの語彙は，過去を魅力的に描く点で共通している部分がある．そのために，観光対象の紹介文の中で三者が混在して用いられることは珍しくない[5]．たとえば2007年版の台湾編は，台北駅の南側，真正面に存在した台湾故事館という民営施設を「1965年当時の台湾の町並みを忠実に再現した台湾庶民生活博物館」とし，「まるで40年前の台湾にタイムスリップしたかのよう」な場所と紹介している（2007年版：83）[6]．

> 随所に価かれたレトロなアイテムの数々はすべてオーナーのコレクション．日本統治期の店構えそのままの食堂や映写室もあり，食事や映画鑑賞もできる．また木造の医務室には保健婦さんが常駐しているので，おむつの交換や簡単なケガの治療も可能．昭和世代にとってはどこか懐かしい気分を味わえる博物館だ．（ibid.）

台湾故事館の紹介は2011年版から無くなるが，これは，同館が閉鎖されたためであろう．いずれにしても，この紹介文で「レトロなアイテム」と「どこか懐かしい気分」として二つの語彙が併用されていることに注意されたい．米国の美術史研究者Guffeyはレトロが主としてモノに対して使用されると論じているが（Guffey，2006），それは台湾編にも当てはまるようだ．また，「懐かしい」が「どこか」や「なぜか」などの副詞を伴い，雰囲気や気分を形容するために用いられるのも，よく目にするパターンだ．

これと似たものに，2010年版の台中におけるレストラン「台湾香蕉新楽園」の紹介文がある．

> 店の外にある古い列車が目印の店．昔の台中の町並みを再現した，ノスタルジー満点のレストラン．日本語の看板や表記も多くみられ，まるでタイムスリップしたかのような雰囲気だ．（中略）レトロなみやげ物も売られている．（2010年版：183）

このレストランはすでに2003年版から「ノスタルジー」という言葉で形容されているが，“ノスタルジア”と“レトロ”を併用するパターンはこの2010年版から2016年版まで継続して見られる．2017年版では紹介スペースが縮小し，単に「調度品も音楽も1950年代」という説明に変化している（2017年版：164）．

これらの引用文が示唆するように，三つの語彙の間に明確な区別を見出すのは容易ではない．文章のメリハリや同じ言い回しの頻用が生むクドさを避けるために，複数の語彙が同時に使用されるという事情もあろう．

2019年版の「特集3　集集線　ローカル鉄道の旅：レイクリゾート日月潭を目指して」(2019年版：18-21)では，三つの語彙が一度に利用されている．まずリード文に「レトロでノスタルジックなのんびり鉄道と自然を満喫できる日月潭．一挙に味わえる台湾中部の名所へGO！」とあり，続く本文で，

> 集集線は，日本統治時代の1921(大正10)年に開通した鉄道路線．線路沿いに広がるバナナ畑や木造の駅舎，屋外プラットホームなどが，なぜか懐かしい南国レトロの雰囲気を漂わせている．(ibid.：18)

として，集集線の懐古性が謳われている．「レトロでノスタルジック」，「なぜか懐かしい南国レトロ」として，“懐かしさ”と“ノスタルジア”がそれぞれ“レトロ”と一緒に使われているが，前二者がたとえば“ノスタルジックで懐かしい”というように同時に現れないことは興味深い．いわゆる“頭痛が痛い”的な文章が出来てしまうという理由が考えられる．それは言い換えれば，“懐かしさ”と“ノスタルジア”の意味は比較的近く，“レトロ”はこれら二者から離れているということを示している．

次章では，この三つの語彙の意味の違いを探ってみよう．

1. “懐かしさ”

“ノスタルジア”や“レトロ”と比べて“懐かしさ”に特徴的なのは，食べ物やその味，おもちゃ，縁日に関わる場面で多用されるという点である．

食べ物や味の“懐かしさ”を述べる箇所は，初版から最新号に至るまで幅広く散見できる．たとえば初版にある日本アジア航空キャビンアテンダントによるコラム「台北でリッチに過ごす」は，老爺大飯店が取り上げ，「コーヒーショップでのおすすめはモカ・ロール．なつかしい味です」(1987年版：118)と記している(1990年版まで継続)．

また2005年版には台湾料理店・日光号の紹介文に「懐かしい台湾の味が並ぶ」という記述が見られるほか，2017年版の特集「高雄必食グルメ案内」(2017年版：250-251)では，「香蕉船」というスイーツを次のように紹介している．

> 大人気のバナナボート．旗山産バナナを使用したバナナアイスのほか、イチゴアイス、チョコレートアイス，生のバナナがのっていて素朴で懐かしい味

このように食や味に“懐かしさ”が用いられる例は幅広く散見できる一方，縁日の“懐かしさ”について語る記述はどちらかというと古いものに多く，近年の号には見受けられない．多くの場合，夜市にかつての縁日の姿を見出すというパターンのようだ．一例として1990年版の台北の夜市を次のように紹介する箇所がある．

> 懐かしい縁日のよう饒河街観光夜市　新しい夜市で，中国人形や大道芸でお客を引きつける．日本の昔の縁日のようで懐かしい．(1990年版：103)

ほかに，花蓮の南濱公園の記述でも，2003年版から2008年版まで“懐かしい縁日の雰囲気”という表現が用いられている．

縁日と同様，おもちゃも“懐かしさ”の対象になる．1999年版における三峡の民権老街は，「都市部では見ることも少なくなった昔懐かしいおもちゃを買っていく台湾人も多い」(1999年版：162)と紹介されている(2002年版まで継続)．

このように，“懐かしさ”の対象になる事物には，個人的な経験を思わせる部分が多い．昔よく

食べた物・その素朴な味わい，子どもの頃に行った縁日，よく遊んだおもちゃというように，個人的な実体験を思い出し，その頃を愛おしく感じるという感情が見受けられる．けれども，昭和ノスタルジアブームをはじめとして数々の懐古現象を見てきた者にとっては，いくら個人的に聞こえようとも，それがマスメディアによって生産・流通されている「集合的ノスタルジア」（デービス，1990）であることは容易に理解できる．

初版のコラム「わ・た・し・の台湾　コリアンダーの香りがいっぱい」（1987年版：120-129）にはそれが分かりやすい形で表れている．これは，漫画家であるうえさきひろこという人物によるもので，全10ページとかなりの長文コラムである．うえさき自身によるイラストもあり，かつての『地球の歩き方ガイドブック』シリーズが帯びていた「読み物」的な雰囲気を体現するものとなっている（山口・他，2009：282）．

うえさきは，「ウーロン茶と中華料理と男性天国というオソマツ」（1987年版：120）な自身の台湾イメージが，短くも濃厚な滞在を経てどのように変わり，充実していったのかユーモラスに描いている．いささか長文になるが，アイスクリームを食べたことをきっかけに子どものころの記憶が蘇るという描写を引用しよう．

> ２種類選んで紙のコップにいれてもらい木のおさじで食べる．やさしい甘さでシャリシャリしていてアイスクリームというよりミルクシャーベットのようで，なかなかおいしい．もうひとつの方は，乳脂肪とはちがうこってりとした舌ざわり，自然の甘味……．これは噂に聞いたさといものアイスクリームに違いない．栗のシャーベットに似てるけど，こっちのほうが素朴でなつかしい味だ．どうやって作るんだろうと考えながら食べているうちにとつぜんわたしは気づいたのだった．
>
> この道はいつか来た道，なのだ．
>
> この街は，わたしの子供時代の日本に似ている．デコラのテーブル，屋台のアセチレンラン式セメント製のゴミ箱，ゴムぞうり，悲しそうなノラ犬の顔，おばさんの笑顔…．タイムマシンに乗って子供時代に戻ったみたいだ．東京オリンピックの頃の日本，32年生れのわたしは７才，小学１年生だった．レディボーデンもポテトチップスもカップヌードルも知らないあの頃，わたしはこんなやさしい味のシャリシャリしたアイスクリームを食べた記憶がある．
>
> 無彩色だった街の風景が少しづつ色づけられていったようなあのころ，昭和30年代後半から，40年代前半にかけてのなつかしいふんいき，西岸良平氏の名作まんが，三丁目の夕日の世界が，ここにはあるのだった．だからこそ，わたしのような臆病者でもリラックスして夜の街を歩きまわれたのだろうし，台湾という国が，年配の方々にうけるのだろう．（ibid.：122）

このアイスの舌ざわりから過去が蘇るというプルースト的な記憶描写は，一見「個人的ノスタルジア」（デーヴィス，1990）を綴ったものに見える．けれども，『三丁目の夕日』というメディアコンテンツの名が挙げられているように，彼女の個人的な懐古がメディアという集合的ノスタルジアに「支配」（ibid.：185）されていることがよく分かる．

彼女はその後「喧騒の街」，映画ブレードランナーを思わせる「猥雑さ」にあふれる台北という「異国」を紹介し，最後にこのコラムを次のように結んでいる．

> わたしたちが忘れてしまったアジアの心，香り，わたしたちの内にあるアジアを刺激する何かが，あるのだ．台湾さん、どうかいつま

でも台湾らしく，アジアの香りを守っていてね．またそのうち逢いに行くからね．（1987年版：129）

ここで台湾を「アジア」と言い換えていることも興味深い．彼女によれば，台湾は“日本が大部分を失ってしまったアジア的な何か”をいまだ保持しており，彼女はそれをこれからも台湾が保持し続けることを願っている．

こうした「アジア」のイメージは，“先進国日本”が世界システムの中でより周辺に位置する“アジア”を新植民地主義的に“援助”してきたという関係性の上に成り立っているといっても異論はなかろう．その“遅れているとしても日本が失ったものをいまだに保持しているアジア”を“脱亜入欧を果たした日本”が一方的に懐かしむというノスタルジアは，「帝国主義的ノスタルジア」（Rosaldo，1989）の一種であり，「資本主義的ノスタルジア」（岩渕，2001）と同型のものである．

けれども，バブル崩壊に端を発する日本の経済的停滞を反映してのことか，こうした「資本主義的ノスタルジア」を思わせる“懐かしさ”の記述はその後すぐに目立たなくなり，上記コラム自体も早くも第2版で姿を消している．

たしかにその後の版の懐古の記述でも食べ物やおもちゃ，縁日といった事物は引き続き“懐かしさ”の対象になるものの，そこに“進んだ日本と遅れた台湾”という関係が入り込むことない．むしろ1990年代に進展した民主化とともに進んだ「本土化」を反映する形で，日本統治期にゆかりのある場所や建築物が“懐かしさ”の対象になっていく．たとえば以下は，1994年版の九份の紹介文からの引用である．

今台湾で静かなブームを呼んでいる町，九份．

台北の北，基隆から約10k m．坂道や階段の多い山間の小さな町．家々の屋根には雨漏りを防ぐためにコールタールが塗ってあり，町の高台から見下ろすと町中が真っ黒に見える．

1890年，この地で金が発見されるまでは，わずか数十人の人々が住む静かな村だった．ところが金が発見されてからは，数千人の一攫千金を夢見る男たちが集まり，一気にゴールドタウンへと変わり，日本統治時代には本格的に金採掘が行われた．最盛期には10万人以上の人々が住み，別名，小香港とも呼ばれた．第二次大戦後には金も採掘されつくし，人々は夢を捨て，この町を捨て以前の静かな町に戻った．そんな歴史を持つ九扮はいま，アンティークショップ，お酒落なコーヒーショップ，アトリエなどが建ち並び，レトロブームとも相まって，若者たちがやってくる．芸術家も多く移り住んでいる．

多様な顔を持つ町九份．台北の喧噪に疲れたら１日静かにここを訪れてみるのもいいだろう．いい知れぬ懐かしさと，哀愁を感じられるだろう．（1994年版：130）

上記箇所の欄外には「映画『悲情城市』『無名的山』などのロケ地で有名」という紹介も添えられている．なお，これはまだ九份が一観光スポットとして扱われていたころのもので，九份が一つの章として独立するのは，1998年版からである．「いい知れぬ懐かしさ」はそれと同時に姿を消す．

今日九份は“赤い提灯が灯るノスタルジックな街”としてオーバーツーリズムとさえ呼べそうな混雑ぶりであり，とても「台北の喧噪に疲れた」ときに癒やされる場所になりそうもない．こうした「静かなブーム」の時代自体を懐かしく感じる台湾市民も少なくないのではないかと思われる．

2.“ノスタルジア”

“ノスタルジア”には“懐かしさ”と共通するものがあるが，食べ物や味などに用いられることはほとんどないようだ．むしろ，前節の最後に言及した九份のように，町並みや景観，モノに対して使われることが多い．その点で“ノスタルジア”は“懐かしさ”よりも“レトロ”に近い．

たとえば最新の2019年版の九份描写は「赤い提灯が連なるノスタルジックタウン」・「近年はノスタルジーあふれる古きよき町並みに出合えるとして」（2019年版：126）というものだし，阿里山・奮起湖駅の老街は「薄暗いアーケードに名産品の店が軒を連ね，ノスタルジックな雰囲気を今も残している」（ibid.：217）というように記されている．

また，“ノスタルジア”が使われる場合の重要な傾向として，台湾人自身が懐古するケースで頻繁に用いられるという点がある．2001年版の特集「古きよき台湾の小鎮・鹿港：いにしえの台湾を今に伝える町　路地に入ればタイムトリップ！」（2001年版：14-15）では，「自らのルーツを模索し始めた台湾の人が，かつての繁栄時代に作られた伝統建築や手工芸などが数多く残る鹿港に注目しだした」（ibid.：15）と記しており，同じページの画像のキャプションに，

> アンティークの店．日本時代の看板が売られている．これらも台湾人にはノスタルジーを感じさせる（ibid.：15）

とある．あるいは，2003年版で台中・民俗公園が閩南人の生活文化を知ることができる場所として取り上げられ，

> 今ではかなり郷村へ行かないとなかなかお目にかかれない建物など，台湾人にとってはノスタルジーをかき立てられるものであろう（2003年版：152）

と紹介されている（2016年版まで）．

このように，“懐かしさ”はどちらかというと日本人が台湾の事物に接して日本人自らの過去を思い出す――台湾に日本性を見出す――という図式に基づいていたが，“ノスタルジア”はむしろ，台湾人の懐古を描写するためにも用いられている．これは言い換えれば，“ノスタルジア”は日本性の有無と関係なく用いられうるということである．

したがって，清朝という，日本性とはかなりの文化的へだたりがあると言ってもいい時代も“ノスタルジア”の対象になる．たとえば最新の2019年版では台湾・神農街は「清代の雰囲気をもつノスタルジックな小路」（2019年版：299）となる．もちろん，現実の神農街が清朝期の雰囲気を持つかどうかはここでは重要ではない．“ノスタルジア”が“清”と共起する事実に意味がある．

2001年版で「ノスタルジックな気分にひたれる茶芸館」として紹介される台北の茶芸館「紫藤廬茶藝館」のケースもこれに似ている．

> 台湾の茶芸館の先駆．日本式の２階建て民家を改造した店で，庭がある．板の間や畳部屋のほか，5〜10人用の個室もある．インテリアはおしゃれなレトロ調．ウェイトレスも昔の中国風衣装を着ている．（2001年版：101）

このように，「中国風衣装」という要素も“ノスタルジア”を生み出す要素の一つになっている．

それでも，“ノスタルジア”は，次に述べる“レトロ”と比べて，“懐かしさ”に近い部分を持つ．先の例を使えば，“ノスタルジア”は「感じさせる」もの，「かき立てられるもの」，あるいはその「気分にひたれる」ものであり，感情に関わるニュアンスが強い．

3.“レトロ”

“懐かしさ”や“ノスタルジア”と比べると，“レトロ”はインテリアや調度品，建物の外観，あるいは雑貨類など，モノを形容するために用いられる例が圧倒的に多い．台湾編における“レトロ”は，1990年版の第3版が初出であろう．先述の台北の茶藝館，紫藤廬茶藝館で“レトロ”が使われている．

> 台湾の茶芸館の先駆ともいえるこの店は，２階建で庭がある．板間や畳部屋，５～10人用の個室に，絵画や陶芸品が飾ってある．インテリアはレトロ調，ウエイトレスも古い中国風の制服を着ている．オーナーは芸術愛好家．茶芸館を通して素晴らしい芸術を広めたいという気持ちから，店の内外に様々な演奏会のポスターやカタログを貼っている．のんびりお茶を楽しんだり，軽い食事もできる．（1990年版：115）

この茶芸館を“レトロ”とする紹介文は，多少姿を変えつつ，2007年版まで継続している．2000年版までは，この引用箇所にあるように，板の間や畳としか言及していないが，2001年版から「日本式の2階建ての民家」（2001年版：101）に変わり，2005年版には「日本統治時代の和風民家」（2005年版：131）というように，より詳しく日本統治に出自があることが示されている．

次章で示すように，台湾編における“レトロ”の使用は近年急増している．上述の茶芸館の例が端的に示すように，いわゆる“リノベ系”のスポットの増加と関連しているからと考えて間違いあるまい．たとえば2013年版の特集「台湾のNEWスポット　レトロでアートな散歩道」（2013年版：14-15）では，台湾のリノベのブームが次のように語られている．

> レトロブームが続いている台湾では，戦前から残る倉庫や工場などの古い建物のよさを活かして現代風にリノベーションしたアートスポットがあちこちに出現中．（ibid.：15）

この特集は，華山1914創意文化園区や四四南村，彩虹眷村，神農老街など有名な観光スポットを取り上げ，各スポットの“レトロ”な事物，雰囲気を魅力的に紹介している．

また，2015年版では，表紙に「人気のリノベーションスポット紹介」の一文が加わるほか[7]，「台湾全土でブーム　人気のリノベーションスポットへ」（2015年版：16-18）という特集が設けられている．そこでの台南・林百貨の紹介箇所には，「レトロなデザインがかわいいいスタッフの制服」（ibid.：16）という言葉がある．

しかしながら，リノベ系のスポットであればそれが全て“レトロ”となるわけではないようだ．たとえば花蓮には，後述する松園別館や花蓮鐵道文化園區，花蓮文化創意産業園區，將軍府といった複数のリノベ系スポットが存在するものの，台湾編では最新版に至るまでこれらのスポットの紹介文に“レトロ”の文字は見られない．

いずれにしても，こうした“レトロ”が示す意味合いは，（Guffey，2006）によるレトロの定義とかなりの程度一致するものだと言える．Guffeyによれば，retroとは，中世などではなく近代以降といった近い過去の事物（製品，ファッションやデザイン，美術のスタイル）に対して用いられる（ibid.：25）[8]．nostalgiaが「ロマンティックな感情」と結びついているのに対して，むしろretroはこうしたニュアンスをシニシズムやdetachment（距離，切り離し，分離）によって減じるものであり（ibid.：20），近い過去についての「センチメンタルでないノスタルジア」（ibid.：11）である．

台湾編における肯定的な“レトロ”の使用状況

から考えると，Guffeyが指摘するretroの「シニカルさ」や「アイロニックさ」には同意しかねるが，それでも主にモノに対して用いられるものである点やdetachmentが重要である点は，本稿の議論を進める上で示唆に富む．というのも，今まで見てきたように“レトロ”が単独で使われる文脈からは，感情を思わせる心理的なニュアンスを見出しにくいからだ．

とはいっても，だからといって“レトロ”を「センチメンタルさのないノスタルジア」と定義することはためらってしまう．後述するように，それとは逆にノスタルジアを“センチメンタルなレトロ”と言い換えることも十分に可能だと思われるからである．

III――懐古表現の外来語化

1.“レトロ”

本章では，懐古語彙の推移に焦点を当ててみよう．下図は，1990年版から最新版まで7巻（約5年毎にピックアップしたもの）の語彙数をグラフ化したものである．台湾編のみならず『地球の歩き方ガイドブック』シリーズではテキストが，冒頭の特集，観光地のリード文，観光地の紹介文，観光スポットの紹介文，それに付随する写真のキャプション，コラム，レストラン・宿泊施設などの紹介文，読者からの投稿記事というように，複数に範疇化・階層化している．しかしながら，この

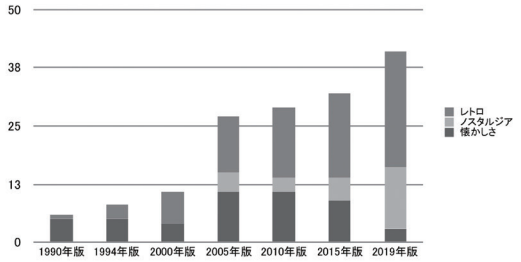

図　台湾編における懐古語彙数

統計ではそうした違いは考慮に入れず，単に，台湾編各版の中で用いられた回数をカウントしている．

まず全体として見れば，懐古表現は増加傾向にあることが分かる．2000年版から2005年版にかけて倍増しているのは，2002年版から2004年版にかけて三つの語彙全てが増加しているからである．たとえば“懐かしさ”と“ノスタルジア”は2003年版から2004年版にかけてそれぞれ5箇所から9箇所へ，3箇所から6箇所へと急増している．“レトロ”は2002年版では5箇所に満たなかったものが2003年版には12箇所に倍増している．

2002年版から2004年版にかけて増加している事実は，同時期に行われた「地球の歩き方ガイドブック」シリーズのリニューアルと合わせて考えると興味深い．このリニューアルは，「『地球の歩き方』に残る貧乏旅行のイメージを完全に払拭すること」（山口・他，282-283）を目的に，外見から構成にいたる多様な面で，ガイドブックとしてのレファランス性を高めたものであったと言えよう．山口・他はそれを「読み物から，ガイドブックに」（ibid.：282）と表現している．その一方で，そういう大改編の後に，台湾編では懐古表現が減少ではなく増加していることは意外に感じられるかもしれない．というのも，懐古は感傷的なものになることが多く，普通の旅行よりも“旅”にロマンを込めたがるバックパッカー的「貧乏旅行」の方が懐古と親和的だと思えるからだ．けれども現実には懐古表現が急増している．このことは，後述する懐古の性質が変化した事実と関係しているからなのかもしれない．

懐古表現が全体として増加している傾向は香港編など『ガイドブック』シリーズの他タイトルにもある程度該当している．懐古が盛んになるというと，いわゆる昭和ノスタルジアブームが思い出されるであろうが[9]，台湾編の場合日本社会での懐古趣味が台湾に投影されたというだけでは説明でき

ない部分がある．先に引いた九份や鹿港の例でも現地台湾社会の歴史ブームが言及されているように，台湾にあった懐古ブームを台湾編が取り入れたという展開の方が事実に即しているように思われる[10]．

この台湾における懐古ブームを考える上で，前述の本土化は避けて通ることが出来ない．本土化の潮流の中で，日本統治の時代は“我々台湾人の歴史の一部”として認知されてきた[11]．国政面では，2002年から始まる陳水扁民進党政権が台湾正名運動などの本土化政策を進めた一方で，市民レベルではたとえば「國片」ブーム（台湾映画ブーム）のような流行も生じている（野嶋，2015）．「國片」には日本統治期の台湾を扱い大ヒットした映画があることは日本でもよく知られている．

台湾編における懐古表現の多くが日本統治期由来の事物に関連して用いられることが示すように，懐古表現の増加は，こうした台湾社会の幅広いレベルで展開してきた文化政治を反映したものとみなしてよい．

こうした本土化の反映は，台湾編における日本統治期の扱い方にも表れており，1990年代後半から2010年代はじめにかけて日本統治期への言及は顕著に増加しているし（岩田，2011），台湾の主要な観光資源である茶についての記述においても“中国茶”から“台湾茶”へと名称の変化が見られる（岩田，2016）．

2. 外来語化とそのパターン

次に指摘する変化は，外来語化である．この外来語化は，“懐かしさ”が減ると同時に“ノスタルジア”や“レトロ”というカタカナ表現が増加するという変質である．

より具体的には，①“懐かしさ”が他の語彙に入れ替わるのではなく，使われなくなるパターン，②“懐かしさ”が使われていた箇所が“ノスタルジック”や“レトロ”というカタカナ語の使用に替わるパターン，③懐古表現が無かった箇所で“ノスタルジア”や“レトロ”というカタカナの語彙が使われる事例が増える，という3つのパターンがある．順に見てみよう．

①“懐かしさ”の消失

まず，単に“懐かしさ”が使われなくなるパターンである．先に確認したように，懐古表現が使用される数は初版から一貫して増えて続けており，とくに“レトロ”や“ノスタルジア”の増加が著しい．それとは対照的に一度増えた使用数を減らしたのが“懐かしさ”である．

台湾編での初出が1994年版というように，九份同様比較的早い時期から懐古表現が使われたものに花東公路がある．

> 公路上には瑞穂，池上，鹿野など日本にもありそうな地名があるが，これらはかつて日本人の移民村だったためだ．沿線の田園風景は美しく，どこか懐かしい気持ちにさせる．（1994年版：194）

この紹介文は大きく変化することもなく，2002年版まで継続する．その後，2019年版に至るまで懐古表現は使われていない．花東公路の例は，，前述の2002年前後のリニューアルと懐古表現の有無が重なった事例の一つと言える．

一方，同公路の起点である花蓮は比較的近年まで“懐かしさ”が使われた例である．2003年版の花蓮の章の冒頭の紹介文は以下のようである．

> 花蓮は台湾三大国際港のひとつとして発展し，歩道まで太魯閣から切り出した大理石で敷かれるなど大理石の町として有名だ．あちこちに日本統治時代の面影を残し，懐かしい風情が漂う．（2003年版：207）

この記述は基本的に変化せず，2016年版まで続く．2017年版からは，紹介文のボリュームが倍増し，説明が充実するが，そこにもはや“懐かしさ”はない．そして次のように結ばれている．

> 現代の花蓮は，いつも海の気配が感じられる明るい町．原住民と台湾，日本の文化が交錯し融合した，不思議な魅力がある町である．（2017年版：210）

2003年版に始まる“懐かしさ”の記述は「日本統治時代の面影」に由来しているが，花蓮の章で同時期に関わる個別の事物が観光スポットとして登場するのは，その数年後になっている．たとえば松園別館の初出は2009年版だ．

次の例は宜蘭設治紀念館である．同館が台湾編に現れるのは2003年版が最初である．同年版の紹介文はもっぱら実用的な情報で構成されているが，2004年版から欄外に外観写真が掲載され，「懐かしいおもむき」（2004年版：221）というキャプションが付け加えられている．この構成はしばらく基本的に変わらず，2017年版から外観写真のキャプションが「懐かしい」ものから「日本より日本らしい風景」（2017年版：224）に入れ替わっている．なお，けっして紹介が縮小されたというのではなく，むしろ逆に紹介文に西郷菊次郎や同館周辺の情報が加えられ，「畳の上を歩くと気持ちいい」というキャプションの内装写真が欄外に掲載されているように，同館の紹介はむしろ充実したものになっている．

②“懐かしさ”と“ノスタルジア”・“レトロ”の入れ替わり

次に，“懐かしさ”が使われていた箇所が“ノスタルジック”や“レトロ”というカタカナ語の使用に替わるパターンとしては，先にも例を引いた九份を挙げることができる．1994年版の引用箇所が示すように，最初期から“懐かしさ”と“レトロ”の混在が見られるが，1998年版からは“懐かしさ”が消え，「家々が建ち並ぶ石段や薄暗い路地など，町はレトロ感覚にあふれている」（1998年版：163）というように，“レトロ”のみになる．

さらに2017年版からは，“ノスタルジア”が用いられるようになり，「赤い提灯が連なるノスタルジックタウン」として九份が以下のように紹介されている（2017年版：126）．

> 九份は台北の東北約30kmに位置する山あいの小さな町．1893年に金鉱が発見され，空前の繁栄を誇るが，金鉱脈が尽きるとともに急激にさびれてしまった．ところが，大ヒットした台湾映画『悲情城市』のロケ地になったことで人気観光地となり，近年はノスタルジーあふれる古きよき町並みに出合えるとして，外国人観光客にも絶大な人気を誇っている．

一方鹿港については，先に見たように2001年版の特集ですでに懐古表現が確認できるが，鹿港の章に懐古語彙が現れるのは2005年版からである．観光スポットの九曲巷が2004年版では「タイムスリップをしたかのような情緒ある路地」と紹介されている．2005年版からはこの紹介文に加えて見出しが「懐かしい雰囲気の九曲巷」に変化している．さらに2017年版では，見出しが「タイムスリップしたかのような路地　九曲巷」に変わる上に，紹介文の中に「時をさかのぼったようなレトロな雰囲気が漂う」という文章が加わっている．

また，先に例として挙げた台南の神農街は2009年版で初めて観光スポットに加えられている．この「清代からの町の名残を感じられる街」の写真も掲載されており，キャプションには「日本統治期とはまた違った懐かしさ」とある（2009年版：303）．「違った」とあるものの，その“懐かしさ”

を測る参照点は日本統治期にある．

神農街のキャプションの“懐かしさ”は2014年版まで続き，その後目まぐるしく変化する．2015年版には「夜も雰囲気がある」（2015年版：307），2016年版には「レトロな町並みが残る」（2016年版：307），そして2017年版には再び「夜の姿も美しい」に戻る．そして2017年版の同街の紹介文本文に「清代の雰囲気を持つノスタルジックな町」という文言が加わるのは，先に述べたとおりである（2017年版：299）．

③懐古表現が無かった箇所における外来語表現の増加

最後は，懐古表現が無かった箇所で“ノスタルジア”や“レトロ”が使われる事例が増えるというパターンである．宜蘭の章の冒頭の紹介文は，2000年版の初出からしばらくは，次のように清朝の歴史を中心に据えたものであった．

> 宜蘭市は宜蘭県唯一の市で，清代，18世紀後半に始まる開拓時代より政治・経済・文化が栄えた．現在も交通の要衝であり，南に蘭陽渓・太平山を望む蘭陽平原の重要都市として開けてきた．本格的な開拓は，1796年に現在の頭城から始まり，1802年以降，福建省の中でも特に潭州人の移民入植が盛んになる．それ故だろうか，町は台湾では珍しい円形の城壁に囲まれていた．今は城壁も堀も残っていないが，城壁跡をなぞるように走る旧城路が，その面影を残している．（2000年版：221）

こうした城壁跡が残る市街の構造を中心に置いた宜蘭の紹介文は，その後コンパクトになったり，礁渓温泉や蘇澳への交通接続の情報が加えられたり，若干の変化を見せる．懐古表現が現れるのは，2012年版である．清朝由来の街の構造の説明に加えて，次のように宜蘭が紹介される．

> 駅周辺の康楽街は，ちょっとしたホテル街を形成しているので，宿探しは楽だ．ほとんどの見どころは，旧城路の内側に位置し，歩いて回れる．町中には日本統治時代の建築も多く残り，文化施設やカフェなどに利用されている．台湾文化と日本のレトロが入り混じった，独特の雰囲気を感じさせる町である．（2012年版：242）

2012年版に“レトロ”が使われ始めた要因として，新たに日本統治期の遺物を利用したリノベ系観光スポットが出現したからではないかと思う読者もいるかもしれないが，テキストレベルで言えば2009年版から2013年版の観光スポットを比較してもとくに変化はない．

宜蘭の紹介にさらなる変化が生じるのは，2017年版である．この版から各観光地域の名称に短いコピーのような文言が加わるようになる．宜蘭には「ノスタルジックな伝統芸能のふるさと」（2017年版：225）という言葉が使われている．これは宜蘭の観光スポットの一つ國立傳統藝術中心から来ているのであろう．同スポットを紹介する箇所の欄外には「ノスタルジックな町並みになっている」というキャプションの外観写真が添えられている．また，宜蘭の章冒頭の紹介文も，「日台の歴史が融合したレトロな雰囲気が漂う」（ibid.：223）というように変化している．

3. 外来語化の背景

ここでは，こうした外来語化が持つ効果について考察してみよう．まず思い当たるのが，外来語化によって懐古がよりオシャレなもの，クールなものになるというオシャレ効果である．日本社会で暮らす者であれば，カタカナ表記や外来語の使用にそういう効果があることは容易に理解できよ

う．台湾編では，このオシャレ効果は明らかに女性をターゲットにしたものである．すなわちオシャレ効果は，懐古する側に女性を取り込むことを狙ったものであり，懐古主体の拡大を目的にしたものと言い換えることができる.[12]

第二は，それとは逆の懐古対象の拡大である．先に“ノスタルジア”を用いることによって，懐古の対象が清の時代にまで拡がるという例を挙げた．このように，日本人ツーリストにとっては決して馴染みのある時代とは言えない過去にまで懐古の射程を伸ばすことができる．

これら懐古主体と懐古対象の拡大は，簡潔に表現すれば，“よりオシャレでより広く”になろう．それは，台湾における近年のリノベブームと合致する．こうしたリノベ系のスポットや事物を形容する上で，カタカナの外来語は“懐かしさ”より適している．

第三は，懐古表現の差別化である．“懐かしさ”が陳腐になった場合，“ノスタルジア”や“レトロ”は新たな代替用品として，新鮮な懐古を提供できる．台湾編の懐古表現は，着々と増える一方であり，減る兆しを見せず，日本の旅行メディアの中で懐古表現は定着していると考えてよい.[13] その中で新たな話題，目玉商品を作り出すには，懐古表現も新たにする必要がある．懐古表現の外来語化は，こうした必要性の一つの現われなのかもしれない.[14]

第四は，記述を明確にする効果である．“懐かしさ”には「いい知れぬ」や「なぜか」，あるいは「どこか」といった理由をぼかす語彙が付随するケースが少なくない．こうした曖昧さを表す語彙を利用し，理由づけを明らかにしないことによって，懐古に説得力を持たせることができる．「この空間は懐かしい」と言い切るよりも，「ここはどこか懐かしい」と柔らかい言い方をすれば，それに同意する人を増やすことが可能だからだ．

けれどもそれは，逆に言えば，曖昧にしなければ使用に耐えないということでもあろう．つまり，“懐かしさ”は，たとえ日本統治期に由来するものだとしても，日本国外の場所や事物に単独で用いるには本来的に無理があるということを意味しているのかもしれない．対照的に，“ノスタルジック”や“レトロ”というカタカナ表現では，曖昧な副詞的語彙を伴わずに懐古を表すことができる．すなわち，外来語化には，“懐かしさ”が持つ限界をカバーする効果があったと考えることもできるのである．

IV――ノスタルジアからレトロへ

1. 脱自己化としての外来語化

“懐かしさ”と“ノスタルジア”そして“レトロ”の三表現を比べると，“懐かしさ”がもっぱら日本に関わるものに向けられ，“ノスタルジア”と“レトロ”は日本外のものも対象となるという傾向を思い出してみよう．これはすなわち，外来語化が“日本中心”から“日本も含むより広い範囲”への拡大を意味しているということである．台湾編ではこの“より広い範囲”は“東アジア”となる．台湾編における懐古表現は，対象を日本統治期から東アジアに拡げつつ，表現を“懐かしさ”から“レトロ”や“ノスタルジア”に入れ替えてきた．それはすなわち，日本人ツーリストにとって必ずしも身近ではない事物も懐古対象に取り込んできたプロセスである．

さらに，三つの懐古表現のうち“懐かしさ”が減少し，それに代わるかのように“レトロ”が増加したという事実を想起する必要がある．つまり，“懐かしさ”と“レトロ”は対極的な関係にある．そしてその関係性は，感情が備わる“懐かしさ”と感情とは関係のない“レトロ”というように，心理的距離――Guffeyの言葉を借りればdetachmentの如何――にもとづいている．ツー

リストが過去に関わる観光対象を自己や自集団に関わるもの，つまり自己からの心理的距離(detachment)が近いものとして感情移入できると想定される場合，そこでは“懐かしさ”が用いられる．逆に，心理的距離が感情移入できないくらい離れていると想定される場合，それは“レトロ”になる．端的に言えば，外来語化は自己から非自己への変化，いわば脱自己化であり，attachmentからdetachmentへの変化である．

このことは，カタカナの機能とも合致している．カタカナとは「柔軟性をもって外国語を受け入れ，日本の文化に浸透させる役割」を持つという(山口，2012：207)．台湾編でもカタカナ表記は，懐古対象を日本という自己から引き離し，日本と非日本の接点に位置づけるように機能していると言えよう．

2. レトロというパースペクティブの重要性

懐古現象に関する従来の研究は，ノスタルジアという用語のもとに考察対象を一括してきた．そのため，レトロが主題になることは，ノスタルジアと比べて圧倒的に少ない．この背景には，歴史の長い現象であるノスタルジアに対してレトロは比較的最近使われ始めたという歴史性や(Woodham，2006：367)，ノスタルジアがナショナリズムと結びついてきたという政治性，そしてノスタルジアと比べてレトロが大衆的・物質的であり，消費に強く結びついているという非精神性などを挙げることができるであろう．ツーリズム研究に関して言えば，ノスタルジアが“かつて存在した本来の，本当の，完全な姿”への憧れを含む点で，ツーリズム研究の主要なテーマである真正性と大きく関わっていることが大きいように思われる[15]．

けれども本稿の議論は，ツーリズムにおいて懐古現象を分析する際に重点をレトロに置くことが重要であることを示唆している．幾度か引用したGuffeyは，レトロを「nostalgia with detachment」や「unsentimental nostalgia」とも呼んでいるが，むしろノスタルジアを「retro with attachment」あるいは「sentimental retro」と呼ぶことも十分に可能ではなかろうか．いわば，懐古から回顧へ，というパースペクティブの切り替えである．

本論部分を締めるにあたり，ノスタルジアからレトロへというパースペクティブのシフトが有する理論面での可能性について触れておきたい．ノスタルジアは過去の想起の仕方である．それと同様，レトロももう一つ別の過去の思い出し方である．雑誌『東京人』の「台北ディープ散歩」という台湾特集号(2019年11月号)，そこに掲載されたエッセイ「消える記憶，蘇る過去」の中で台湾研究者の新井一二三は「リノベ」が「黒板消しのように，直近の歴史を消し去っていく」と記している(新井，2019：80)．これはこれで示唆に富む比喩である．けれども，リノベがレトロであるのであれば，リノベによって示される“昔”も，それはそれで一つの過去と言える．むしろ，メディア研究者の高野が「過去と出会う面白さに力点が置かれた『レトロ』」(高野，2018：243)と言うように，レトロは，ノスタルジアと同様，過去との接し方の一つと捉えるべきである．

日本発の台湾向けツーリズムの中で日本統治期のヘリテージは不可欠の要素を構成している．台湾編における日本統治期の記述は，1990年代半ばから2000年代にかけて大きく変化している(岩田，2011)．すわわち，コラムや特集の中で批判力のある用語(“植民地”など)で語るというスタイルから，各観光スポットの紹介文の中で中立的な用語(“統治”など)で言及するスタイルへの転換である．こうした過去との向き合い方の変化の中でレトロ概念がどのような役割を果たしているのか，レトロに重点を置くことによって，ノスタルジアとは異なる過去の在りよう――ノスタルジアよりもさらにポストモダン的な過去？――や真正性の

メカニズムにアプローチできる可能性がある.[16]

V——むすびにかえて

以上本論では,『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ台湾編に焦点を当て,“懐かしさ”,“ノスタルジア”そして“レトロ”という懐古表現の分析,ならびに懐古現象に関する分析枠組みの再検討を目的に議論を進めてきた.

これら三つの懐古表現は一つの紹介文の中で同時に用いられることが珍しくない一方で,それと同時に傾向として違いも認められる.また,推移を見ると懐古表現の外来語化という変化が生じている.この変化は,懐古する主体と懐古される客体という関係性の中で考えると,客体が主体たる日本人ツーリストから遠ざかっていくプロセスでもあるという点で,懐古の脱自己化と言い換えることができよう.

さらに,レトロを考察の中心に置く必要性についても指摘した.懐古現象は,ノスタルジアという観点からなされることが多い.その場合レトロは周辺的な扱いになる.けれども台湾編に見られる外来語化/脱自己化という変化,そしてレトロが最も頻繁に用いられる状況にもとづけば,むしろ懐古現象はまず第一にレトロというパースペクティブからなされるべきではなかろうか.それは,レトロを“センチメンタルさのないノスタルジア”とするのではなく,逆にノスタルジアを“センチメンタルなレトロ”と捉える視点への転換であり,いわば懐古から回顧へというシフトである.

今後の課題については本論部分でも適宜言及してきたが,ここでは本稿を締めくくるに当たって大きな方向性を二,三列挙しておきたい.

まず多様なメディアに基づく分析の必要性である.たとえば昭文社の『まっぷる 台湾 '20』では,神農街が路地として「昔から暮らす人々が共存し,懐かしくもしゃれた街並みを形成している」,「ノスタルジックな雰囲気の路地にはレトロな店が並ぶ」というように(K&Bパブリッシャーズ,2019:120),昭和ノスタルジアを思わせる“懐かしい路地”という図式で懐古的に紹介されている.このように,本稿の議論は基本的に台湾に関する他の日本語旅行メディアにも多かれ少なかれ当てはまるものと理解しているが,『るるぶ』や『まっぷる』といった他のメジャーなガイドブックシリーズ,映画,マンガあるいはテレビ番組(とくにBSの旅行番組)も分析の対象に加える必要があろう.

第二が,他のデスティネーションを対象にした日本語旅行メディアの分析である.本稿冒頭でも香港について短く言及したが,懐古表現とくにレトロの増加は台湾以外の少なからずのデスティネーションにも当てはまると考えてよい.そこで中国の文革グッズやドイツのOstalgieがどのように表象されているのか,台湾編の分析を下に考察対象を広げることで懐古現象の理解を深めることができるであろう.

第三が,ジェンダーや世代に注目し,懐古主体を検討する重要性である.たとえば,1980年代以前の日本からの台湾旅行には,本稿で引用した初版のコラムにもあるように,「男性天国」と揶揄あるいは批判される部分が多々あった.そして,この台湾イメージを打ち消すために日本アジア航空が女性や家族を主人公にした台湾旅行を広めるためのキャンペーンを打ち出し,かつ成功していったのは,よく知られた事実である.台湾編の初版と第二版でも女性旅行者の体験談を全面に押し出していたり,日本アジア航空のCAによるコラムが掲載されているが,それもこうした流れの一つと解釈してよい.そこでの懐古が,“遅れた台湾を先進国の日本人女性が懐かしむ”という,帝国主義的ノスタルジアや資本主義的ノスタルジアを思い出させるものであったことは興味深い.こうした懐古がどのようなジェンダー性・世代性

を帯びつつ最新のものにまで至っているのか，2010年代に入ってガイドブックの女性化が一段と進んでいるように思われる中で考察していく余地は大いにあると言えよう．

［付記］

本研究は，ドイツ研究振興協会（DFG）の研究プロジェクト「Russian-Language Poetry in Transition: Poetic Forms-Addressing Boundaries of Genre, Language, Culture, and Society across Europe, Asia, and the Americas」（FOR 2603, トリーア大学）の助成を受けた．記して感謝したい．

謝辞

この小論は，本年度をもって立教大学を退職なさる豊田由貴夫教授に捧げたい．

はじめて先生にお会いしたのは，先生が文学部に着任した年である．それは私が修士課程に入学した年でもあった．大学院時代のゼミ，勉強会，そして合宿が懐かしく思い出される．博士課程修了後観光学部を出入りしていたころにちょうど先生も観光学部にお移りになったことで，さらにお付き合いを深める機会に恵まれた．光栄である．

思えば長いお付き合いである．何度先生の寛容さに助けられたことか．研究はもちろん教育の重要さ，大学業界で生きていく心構えなど，さまざまなことを先生から教えていただいた．

ご退職後も勉強会やフィールワークでご一緒できれば幸甚の至りである．先生のますますのご健勝をお祈りしたい．

注

1 近年の“リノベ”の現象についての学術研究はいまだ少なく，ジャーナリズムが扱う段階に留まっているようだ．たとえば台湾で日本の神社が「懐日ブーム」の一つとして報告しているウェブ記事「「リノベ」で復活する台湾の日本神社――歴史のなかの「自分探し」が背景に」（野嶋，2016）．

2 『地球の歩き方ガイドブック』シリーズを日本で最もメジャーなガイドブックシリーズ，少なくともその一つと位置づけることに異論はあるまい．ちなみに，代表取締役社長（当時）の藤岡比左志をインタビューした記事では，日本の海外旅行向けガイドブック全体における「地球の歩き方」のマーケットシェアが「約50%」とされている（立教大学大学院ビジネスデザイン研究科，2009：1）．ほとんどの書店で「地球の歩き方」のフラッグシップモデルとでもいうべき『ガイドブック』シリーズを見つけることができることを考えれば，この数字はとくに驚くほどのものでもかなろう．

3 このキャッチコピーは，語彙間に空白が入るといったわずかな変更が加わることがあるが，1994年版から1997年版の間基本的に変化していない．またこうした表紙のキャッチコピーは，後述する2000年ごろのリニューアルで姿を消している．キャッチコピーが果たした機能については（Iwata, 2019）で論じている．

4 通常『地球の歩き方ガイドブック』シリーズでは，たとえば“2019～2020年版”というように，刊行年とその翌年の組み合わせがタイトルに加えられているが，本稿では見やすさを重視して，早い方の年のみを掲載することとする．

5 これは台湾編の不備ではなく，むしろ日常使う語彙の間に普通に備わる意味の重なりに起因するものと思われる．『広辞苑』などの日本語辞典でも，懐古に関する語彙が明確に区別されているとは言えず，意味に重複が見られる．

6 本稿では台湾編からの引用については，読みやすさと参考文献一覧の見やすさを念頭に置いて，簡潔に（年版：頁）と表記することにした．

7 この表紙のコピーは，その年の版の目玉を紹介するために設けられたようであり，その後毎年多様な観光地やアトラクションが掲載され，最新号に至っている．

8 筆者の手元にあるオックスフォード大学出版の『モダンデザイン辞典』を開くと，「retro」（Woodham, 2006：367）のボックスコラムはあれども「nostalgia」の項目はない．この事実も，retro概念のモノ志向を示す一つの証左であるように思われる．

9 2000年代に生じたこのブームについては，昭和ノスタルジーブームや昭和レトロブームといった呼称があるが，ここでは昭和ノスタルジアブームで統一する．

10 旅行メディアに懐古表現が出現する上で，ホスト側の状況とゲスト側の状況のどちらが大きな要因なのかという問題についてはさらなる考察が必要であろう．

11 これについては日本統治期の建物の古蹟認定について論じた（上水流，2007）が参考になる．近年では，台湾各地の日本統治期の神社が台湾人によって再建される例もある（野嶋，2016）．

12 高野によれば，日本社会でレトロなライフスタイルを扱う女性雑誌は2000年代後半目につくようになるという（高野，2018：320）．2010年代は，台湾特集を組む女性雑誌は珍しくない．こうしたジェンダーの観点から懐古を考察することは今後の課題である．

13 たとえば最近の例に2019年10月に刊行された『日経トレンディ11月号臨時増刊 大人がはまる台湾　新しいのに懐かしい魅力全開』がある（日経トレンディ，2019）．

14 もしそうであるとすれば，いつか外来語的懐古に飽きが来るときには懐古表現が“懐かしい”や“郷愁”といった和語を用いたものに再変化する可能性も推測できよう．

15 ノスタルジアと真正性については（ブルーナー，2007），

（Sharpley, 2008：241-247）など．

16　レトロのポストモダン性については，（ボードリヤール，1984：57-64）や（Guffey, 2006：21-22），（Dermody and Breathnach, 2009：11-12）など．

文献

『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・台湾編に関しては，初版の書誌情報のみ記載している．

- 天野景太　2017「レトロツーリズムの文化論――昭和の表象が織りなす観光のアクチュアリティ」『日本観光学会誌』(58) 28-38頁．
- 新井一二三　2019「消える記憶，蘇る過去」『東京人：台北ディープ散歩』2019年11月号．
- 岩田晋典　2011「旅行メディアに見る植民地時代：『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・台湾編を中心に」『文明21』第27号，135-156頁．
- 岩田晋典　2016「茶のアイデンティ――『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ台湾編における表象分析」『文明21』第37号，63-80頁．
- 岩渕功一　2001『トランスナショナル・ジャパン――アジアをつなぐポピュラー文化』岩波書店．
- 片倉佳史　2009『台湾に生きている「日本」』祥伝社．
- 上水流久彦　2007「台湾の古蹟指定にみる歴史認識に関する一考察」『アジア社会文化研究』第８号：84-109.
- K&Bパブリッシャーズ　2019『まっぷる 台湾 '20』昭文社．
- 高野孝平　2018『昭和ノスタルジー解体――「懐かしさ」はどう作られたのか』晶文社
- 地球の歩き方編集室　1987『地球の歩き方31　台湾』ダイヤモンド・ビッグ社．
- デーヴィス，F.　1990『ノスタルジアの社会学』(間場寿一・他訳)，世界思想社.
- 日経トレンディ（編）　2019『日経トレンディ11月号臨時増刊 大人がはまる台湾　新しいのに懐かしい魅力全開』日経BP出版．
- 野嶋剛　2015『認識・TAIWAN・電影 映画で知る台湾』明石書店．
- 野嶋剛　2016「「リノベ」で復活する台湾の日本神社――歴史のなかの『自分探し』が背景に」『Yahoo! ニュース』(https://news.yahoo.co.jp/feature/245) 2019年10月15日閲覧．
- ブルーナー，E.M.　2007『観光と文化――旅の民族誌』(安村克己・他訳)学文社．
- ボードリヤール，J.　2008『シミュラークルとシミュレーション』(竹原あき子訳)法政大学出版局．
- 山口さやか・山口誠　2009『「地球の歩き方」の歩き方』新潮社.
- 山口謡司　2012『日本語にとってカタカナとは何か』河出書房新社．
- 立教大学大学院ビジネスデザイン研究科　2009「Business now! 株式会社ダイヤモンド・ビッグ社藤岡比佐志氏」『Biz com』34号（2009年9月30日）：1-2.
- Dermody, B. and Breathnach, T.　2009 "New Retro: classic graphics, today's designs London". Thames & Hudson.
- Guffey, E. E.　2006 "Retro: The Culture of Revival". Reaktion Books.
- Iwata, S.　2019"Slogans, Poetry and Platitudes in Japan's Travel Media: Function of Stereotype in the "Chikyu-No-Arukikata" Guidebook Series", 『愛知大学国際問題研究所紀要』第153号, pp.1-21.
- Jafari, J.　2003 "Encyclopedia of Tourism". Routledge.
- Rosaldo, R.　1989 "Imperialist Nostalgia". Representations. No. 26, pp. 107-122
- Sharpley, R.　2018 "Tourism, tourists and society". Routledge.
- Woodham, J. M.　2006 "A Dictionary of Modern Design". Oxford University Press.